

<小学生・中学生・高校生の意見発表>

幸せの笑顔

蒲郡西部小学校 6年 竹内花音

花音さんは、常に周りをよく見て、自分にできることを考え実行できる積極的な人です。蒲西小夏まつりでは、チームの中心となってライトパフォーマンス（LEDライトによる火の舞）のダンスを考え、披露してたくさんの人を感動させました。

私のおじいちゃんは私が保育園に上がるころから車イスで生活していました。しゃべることも歩くこともできませんでした。どうして車イス生活になってしまったのかは覚えていません。

ある日、アルバムの中から一まいの写真を見つけました。そこには、元気だったころのおじいちゃんと、私たちの姿が写っていました。写真の中の私とおじいちゃんは、笑いあっていて、とても幸せそうな様子でした。そのアルバムのページをめくっていくと、おじいちゃんに買ってもらったおもちゃを大事そうにもっている、たくさんのおもしろい写真もありました。それらの写真を見たとき、今までのおじいちゃんに少しでも恩返しをしたい、笑顔になってほしいと思いました。

それからは、おじいちゃんにどんなことができるのかを一生懸命に考えました。

おじいちゃんの家に行ったときには、今まで以上に学校であったことを話しました。おじいちゃんのねているベッドの横へ行き、「おじいちゃん、来たよ。」
「今日テスト100点とったんだよ。」
「今日卓球の試合で勝てたんだよ。」
と、私が毎日頑張っていることを話しかけました。すると、おじいちゃんはいつも大きく

うんうんとうなずきながら、笑顔で聞いてくれました。それだけでうれしくて、家に行くと必ず話しかけるようにしました。

帰るときには、力は弱いけれど、大きくやさしい手とあく手をしました。そのときのおじいちゃんの手は温かさは今でも覚えています。言葉では伝わってこなかったけれど、なんとなく言いたいことは伝わってきました。

年に2、3回おじいちゃんの家に行って、家族みんなでご飯を食べることがあります。そのときには車イスが入れるように、食卓のイスを移動させました。

「おじいちゃん、これもおいしいよ。」

「おじいちゃん、それは食べないほうがいいよ。」

と、笑いながら食べました。家族みんなで過ごした時間はかけがえのないものを感じました。

高学年になり、おじいちゃんの家に行ける時間は少なくなりましたが、会える時はうれしかったです。いやなことがあったときでもおじいちゃんの顔を見ると、元気



が出てきました。

おじいちゃんのお世話は、いつもお母さんとおばあちゃんがやっていました。ちょっとでも二人のお手伝いがしたくて、おばあちゃんが車イスをおして移動するときには物をどかしたりしました。

私はおじいちゃんのお顔が大好きでした。とても楽しそうで、幸せそうで…。そんなお顔を見ていると自分もお顔になりました。

今年の3月、おじいちゃんは天国に行ってしまった。私は小さいころから今までずっとおじいちゃんから幸せをもらっていたことに改めて気づきました。ほんのちょっとでも私のしたことでおじいちゃんが幸せに思ってくれたかな。だから、届くかはわからないけど、おじいちゃんに伝えたいです。

「おじいちゃん幸せをくれてありがとう。天国に行ってもわすれないでね。」

明るい家庭にするために

塩津小学校 6年 西尾 優人

優人くんは、だれにでも優しく接し、仲間からの信頼も厚いです。前期では学級代表として「楽しい学級をつくろう」と、学級を引っ張りました。後期では、児童会長となり、心地よい学校にしようと先頭に立って働きかけています。

ぼくは、家庭が少しでも明るくなってほしいと思い、小学校3年生の頃から、積極的にお母さんのお手伝いをするようになりました。

3年生の頃から、お父さんは、仕事の都合で海外でお仕事をするようになってしまいました。だから、家にお父さんがいなくなってしまう、家には、お母さんとお兄ちゃん、そしてぼくだけになってしまいました。

そのため、お母さんは、今までお父さんがやっていた、家のこともお母さんがやるようになってしまいました。たとえば、ぼくと、お兄ちゃんのお習いの送りむかえにくわえ、おふろそうじや家全体のそうじもお母さんがやるようになっていきました。そして、さらにお母さんがやっている朝ごはん、昼ごはん、夜ごはんをつくることなど、家のほとんどをお母さんが全て動かしていくようになっていきました。

それを見たぼくとお兄ちゃんが、このままだとお母さんが毎日大変で、息をつくひまがなくなってしまうと考えて、積極的にお手伝いをするようになりました。でも、この時はぼくがまだ3年生で、お兄ちゃんが中学1年生だったので、まずは簡単なお手伝いからスタートしました。

最初はぼくが朝、新聞をとりに行く係で、お兄ちゃんがげんかんのそうじをすることになりました。

でも、習い事で二人ともいそがしくなり、あまり長くは続きませんでした。

そこで、あまり長くは続かなかった理由をぼくとお兄ちゃんできると、時間を有効に使うようになりました。

時間を有効に使うことで、さらに別のお手



伝いをすることができるということがわかってきました。だから今度は、習い事を雨が降っていない日以外は、なるべく自転車でいくようになりました。あまり家から遠くはないところで、習い事をしていたので、これはずっと続けることができました。

かなり役に立つことをしてきたので、お母さんはかなり楽になったと言っていてとてもうれしかったです。

ぼくは、このお手伝いの体験を通して人の役に立つことがかなりすることができるよ

うになったと思います。この体験は、とても簡単なことだったけどこんなささいなことをするだけで、人の役に立つことができるということを教えられた体験になりました。ぼくは、こんな簡単なことをするだけで、人の役に立てれると思いました。

みなさんの家庭でも、いろいろな理由で困っている人がきついていると思います。そういう人を助け、良い家庭をつくりあげて、すべての家庭が明るくなって、社会も明るくなってほしいと願っています。

私のヒーロー

蒲郡中学校 3年 稲吉くるみ

くるみさんはいつでもニコニコ、温かい心で周りの仲間を包み込む存在です。合唱コンクールでは課題曲の指揮者。どんな練習をしたらいいのか先を見て考える、クラスのブレーンでもあります。周囲のために惜しまず働く、くるみさんの温かさが伝わる発表を期待しています。

ヒーロー。それは多くの人に夢や希望を与えてくれるカッコいい存在。そんな私のヒーローは我が家の祖父です。祖父は82歳とは思えないほど元気で、若々しく、カラオケの腕前は蒲郡市のカラオケ大会で優勝したほど上手です。祖父は自分で立ち上げたボランティアグループで介護施設に行き、カラオケの慈善活動を行っています。その実績は500回を超えました。

そんな祖父について詳しく知りたいと思い小学4年生の夏休みの自由研究で祖父のボランティア活動取材しました。訪問先での祖父は本当にきらきらしていてカッコ良かったです。入所者の方々に、「体調はいかがですか」と笑顔で尋ね、マイクを差し出して一緒に歌い、肩をぽんぽんと優しく叩きま

す。入所者の方々は笑顔で楽しく過ごしていました。私は自由研究の中でたくさんの人にインタビューもしました。入所者の方々は「本当にありがたい。おじいちゃんにはたくさん笑顔と元気をもらっています。」と答えてくれました。そんな思いやりのあふれる行動を目の当たりにし、私は祖父をヒーローと思うようになりました。

中学3年生になり、福祉について新たに考えました。祖父のボランティア活動は慰

問と表現されますが、なぜ訪問ではなく慰問



なのだろうかとふと考えました。辞書で慰問とは「不幸な境遇の人や災害・病気で苦しんでいる人などを見舞うこと」と書いてあります。「慰問なんていない」とネットの書き込みではボランティア団体は要介護者を不幸な人と決めつけて、世間一般的にも介護を不幸と捉えている人が多いと批判する人もいました。きらきらしていたものが段々曇りだしました。祖父のボランティア活動は批判されるものなのかとすら感じました。

祖父のボランティア活動は、友人が倒れたことがきっかけでした。「主人が介護施設で寂しい思いをしているので、カラオケで元気づけてほしい。」と友人の奥さんから依頼があったそうです。その経験から祖父は自分たちのカラオケが高齢者や身体の不自由な方に少しでも楽しみと喜びをお届けすることができるということを実感し、もっと続けたいという意欲が湧き、ボランティアグループが発足しました。お互いに刺激し合える存在だということをお話してくれました。

祖父たちは希望と笑顔と楽しみを共有しており、介護施設の皆様からはほめてもらってうれしい喜びと元気をいただいています。一方通行ではなくお互いさまなのです。そんな祖父の活動を私は誇りに思います。

祖父の大きな手は、分厚くたくさんのしわがあり、長く豊かな人生を過ごしたことがわかる温かくて優しい手です。握手をすると手から祖父のパワーが伝わってきます。私にも勇気とやる気を与えてくれます。

私も尊敬する祖父のように周囲の人たちを笑顔にし、楽しませ、希望を与えられる、そんな大人に成長したいです。今はまだ私の手は小さいけれど、いつか祖父のような温かくて優しい手になりたいです。私も豊かな人生を送れるように、一生に一度しかない今を必死にもがき、いつか祖父に、「じいちゃんと一緒にだな」と言ってもらえるように努力します。私のヒーローいつまでも長生きして、ずっと私の側で私を見守ってください。

思い込みからの脱出

三谷中学校 3年 藤田 侑 禾

侑禾さんは真面目でだれにでも優しく接する人柄で、仲間からの信頼が厚いです。剣道部の中心選手として活躍し、チームを引っ張りました。選挙管理委員長となり、よりよい学校づくりのために、全校の先頭に立って頑張っています。

「あの子、私のこと嫌いなんだろうな。」

皆さんはそう思ったことはありますか。私は小学校から中学2年の前期くらいまで、超ネガティブ思考でした。私は人見知りが激しく、なかなか自分の素の部分が出せませんでした。学校では、猫をかぶり、「すごくおとなしい子」を演じていました。クラスの中心

にしているような明るい人たちは、私みたいな人なんか嫌いなんだろうな、話したくないんだろうなと考えて毎日過ごしていました。

そんな私の考えを変える出会いがありました。中学2年生の半ば頃、私は海外派遣のメンバーとしてオーストラリアに行きました。でも、学校でもうまく話せない自分が、

全然知らない人の中でうまくやっていたのか不安な気持ちがありました。自己紹介の時に、自分と同じ趣味をもった子を見つけました。そのこと話してみたいと思いました。でも、やっぱり自分から話しかけることはできませんでした。しかし、向こうから私に話しかけてくれました。最初は緊張してうまく話せなかったけど、その子はそんな私に嫌な顔ひとつせず、笑顔で接してくれました。共通の趣味があることで少しずつ私も話せるようになり、いつの間にか自分の素を出せるようになっていました。そのこと話している時間は、とても面白くて、あっという間に時間が過ぎるような気がしました。

しかし、海外派遣が終われば、学校も違うため、なかなか会えません。せっかく素を出せる自分になれたのに、また元に戻るなんて嫌だと思った私は、学校でも少しずつ自分を出すようにしました。今までと違う自分を出すのは怖かったけれど、無理をして頑張って話していたこれまでよりも、素を出して話すほうが何倍も楽しかったです。

「侑禾ちゃんってこんなに面白かったんだね」

「イメージと違った」

「私のことは呼び捨てでいいよ」

今まで自分のことを嫌っていると思っていた人たちからそう言ってもらえた時は、なんだか恥ずかしいような嬉しいような複雑な気持ちでした。自分を出すことで、今まで

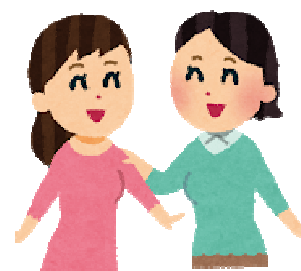
あまり話したことがなかった人とも仲良くなることができました。

私は今まで自分の勝手な思い込みで「私のこと嫌いなんだろうな」と思っていたけれど、本当はみんなのことを嫌って遠ざけていたのは自分自身だったのだろうなと今は思います。自分から何も行動しないで、「私には友達ができないんだ」とか「すぐ嫌われちゃうんだ」とか思っていました。

でも、そんな考え方は間違っていました。勇気を出して自分が変わろうとしたら周りのみんなの反応も変わりました。

「素で友達と接すること」は簡単なことではありません。私にと

ってはすごく大きな壁でした。でも、振り返ってみると、それも自分が思い込んでいただけだった



のかもしれない。本当は簡単に乗り越えられるものだったのかもしれないのに、その壁の向こうに自分の悩みを解決するすべがあることに気づかず、何も変わらない道を進んでいたのだと思います。その壁を乗り越える大切さに気づかせてくれたのは、海外派遣で出会った友達です。中学校 2 年生になって、やっとみんなと本当の友達になれた気がします。

思い込みからの脱出。私は今日も楽しく友達と過ごしています。

生まれた場所が違うだけなのに

大塚中学校 3年 俵 亜 依

亜依さんは、責任感が強くクラスメイトからの信頼が厚いです。体育大会では応援旗の実行委員長として、部活動ではバレーボール部のキャプテンとして、何事も先頭に立って仲間を引っ張っています。

みなさんは、「人権」と聞いて、何を思い浮かべますか。私は、社会の授業で「人権」について学び、日本人は憲法で「人権」が守られていることを知りました。では、日本に住む外国の方の「人権」はどうでしょうか。

私が住む大塚町には、外国から来た子供たちがたくさんいます。しかし、私たちは彼らを特別「外国人」というふうに意識したことは一度もありません。単に小学校のころからの友達の一に過ぎないからです。実際に、私のクラスにも外国から来た友達がありますが、彼はとても頭がよく、クラスでも人気者です。また、中学1年生の時にブラジルから日本に来た友達もいました。彼女は、日本に来て間もない頃、日本語は全く話すことができませんでした。そこで、私たちは、担任の先生に買ってきてもらったポルトガル語の本を使って、頑張って彼女とコミュニケーションをとりました。その後、彼女の日本語はぐんぐん上達し、自然とクラスにも溶け込んでいきました。しかし、2年生の終わり頃、彼女が転校することが決まりました。サプライズで開いたお別れ会では「旅立ちの日に」の歌のプレゼントをしましたが、みんな号泣してしまい、まともに歌が歌えなかったことを覚えています。

私たちの生活の中に外国の方がいることは、当たり前のことで、日常のことに過ぎません。それなのに、なぜ「外国の方の人権」を考えようと言われるのでしょうか。

それは、日本に住んでいる外国の方で、人権が保障されている人が少ないからだだと思います。

先日、外国から日本に技能実習生として働きに来ている方は、低賃金で長時間働かされているというニュースを見ました。同じ人間として、おかしいと思いました。外国の方の受け入れ体制をしっかりと見直すべきだと思います。

日本に来たばかりの技能実習生は、当然ですが、日本語を話すことができません。私たちと彼らには、言葉の壁があるのです。私たちは相手の言語の簡単な言葉だけでも覚えて話しかける必要があると思います。挨拶だけでも構いません。私たちが、日本語の話せない転校生の子と、頑張ってコミュニケーションをとったように。まずは、心を通わせることから、始めてみたらいいのではないのでしょうか。

私が住む大塚町では、昔から外国の方を受け入れており、すでに受け入れ体制ができています。

働き場所もありますし、市営住宅もありますから、住む場所にも困りません。大塚町に住む外国の方は、町に溶け込んでいます。そして、みんなが気楽に話しかけます。



私は、一日も早く、外国の方への差別が世界からなくなることを願っています。いえ、外国の方への差別だけでなく、この世からす

べての「差別」がなくなることを強く望んでいます。そのために、私は身近なことで、できることから始めていこうと思っています。

言葉の力で

西浦中学校 3年 鈴木 愛 奈

愛奈さんは、吹奏楽部長や前期保健委員長を務め、リーダーとして活躍しています。自分の役割をしっかり果たす責任感の強さや仲間を気遣う優しさを持ち、仲間から厚い信頼が寄せられています。

みなさんにとって、「言葉」とはどんなものですか。

最近、私たちと同じくらいの歳の子がいじめが原因で自ら命を落としてしまったり、不登校になってしまったりする、そんな悲しいニュースを多く耳にするようになりました。いじめのなかで一番身近にあり得るのが、言葉のいじめです。「うざい」「死ね」「消えろ」。人は考えるより先に思ったことをストレートに相手にぶつけてしまうことがあり、時にナイフのように相手の心を突き刺してしまうことがあります。しかし、言葉はそういう恐ろしい力をもっている反面、素晴らしい力ももっています。2年前、それを強く実感するできごとがありました。

当時中学1年生だった私には、悩みや辛いことが数え切れないほどありました。部活動やクラスメイトとの人間関係、いろいろありすぎて本当につらかったあの日々を私は決して忘れることはないでしょう。友達や先生の前では、今までより内気になってしまい、挨拶すらみんなにどんな反応をされるかが怖くて、できないくらいでした。当たり前のことがしっかりできない自分をどうしてい

いのか分からず、解決しないまま「キャパオーバー」していました。どこにこの気持ちをぶつければよいか分からず、家族にあたったり、怒りに突っ走ったりしていて、家族との関係も最悪でした。こんな心に余裕をなくしていた私を助けてくれたのは、一人の友達でした。そのころの私を気遣って、

「どうしたの。何かあった。」

と声をかけてくれました。私が、

「うん、ちょっとね。」

と返すと、

「話、聞くよ。」

と言ってくれ、私のそのときの悩みや辛かったこと、家族や他の友達には言えないことを全て話しました。友達は長い時間、私の話をしっかり聞いてくれました。時にはアドバイスを言ってくれ、私はこんなに優しい友達が自分の身の回り
にいることへの感謝や喜び、今までの辛かった気持ちが涙となってあふれ出しました。



「大丈夫、頑張れ。」

友達が最後に行ってくれたこの一言がどれほど私の気持ちを救ったことでしょう。

相手の気持ちをしっかり聞き入れ、辛さを理解し、気持ちに寄り添った言葉は、たった一言でもその人を救う大きな力になります。もし、あのときの私のように悩んでいる人が

周りにいたら、今度は私が元気づけることができる言葉をかけてあげたいと思っています。あなたの周りにも、悩みを抱えて苦しんでいる人がいるかもしれません。お互いの心を支え合う温かい言葉がたくさん交わされることで、悩んでいる人が救われることを私は強く願っています。

考える

形原中学校 3年 中 澤 奈 優

チャレンジ精神旺盛な奈優さんは、様々な実行委員や選挙管理委員などの多くの役を担ってきました。3年生前期生徒会執行委員として、あいさつ運動に意欲的に取り組むなど、明るい学校づくりに努めています。

私の祖母は足が悪く、買い物をするときにはゆっくりと動くことしかできません。一人では大変なことも多いので、買い物には私もついていくことがあります。

ある日、祖母とスーパーへ行き、商品の棚の前で品物を選んでいると、

「ちょっとどいてください。」

と言って、男の人が祖母のことを押しました。そして、足の悪い祖母はよろけてしまいました。すると、その男の人は、

「はあ何だよ。」

とだけ言って立ち去りました。私はこのときどうしてお年寄りにだけ態度をかえる人がいるんだろうと不思議に思いました。同時に悲しくも思いました。そのときの祖母の表情は驚きや悲しみなどのさまざまな感情が交ざったような表情でした。私ははっとして、

「大丈夫。」

と祖母に問いかけると、

「大丈夫だよ。私が遅かったのがいけないんだから。」

と祖母はぎこちない笑顔で答えました。

それからの買い物では、祖母は私に申し訳なさそうに物を取ってほしいと頼むようになりました。それまでは一緒に品定めをしながら買い物を楽しんでいたのに、あの出来事から祖母は買い物を楽しめなくなっているようでした。

しかし、ある日こんなことがありました。祖母と買い物をしていると、突如後ろから、

「あの、すみません。」
と声をかけられました。私はまた祖母が何か言われるのではないかと不安に思い、つい、

「おばあちゃん、こっちよけて。」
と言って腕を引っ張ってしまいました。振り返ると、車いすに乗ったおじいさんがそこにいらっしやいました。そのおじいさんは私に



「お嬢ちゃん、私はどいてほしくて声をかけたんじゃないよ。上にある商品をあなたのおばあさんにとってもらおうと思って声をかけたんだよ。」

とおっしゃいました。そのとき私は、どうして勝手に祖母が邪魔になっていると決めつけて強い口調で話しかけ、腕を引っ張ってしまったんだろうと、恥ずかしさと祖母への申し訳なさでいっぱいになりました。祖母がそのおじいさんに商品を取ってあげると、そのおじいさんは

「ありがとうございます。本当に助かりました。」

と最高の笑顔で言うてくださいました。

私が祖母にしてしまった行為は、祖母のことを考えていないものでした。また、車いすのおじいさんは「断られるかもしれない」という思いがある中、勇気を出して声をかけたかもしれません。それなのに、私の勝手な思い込みで、そのおじいさんまで傷つけることになっていたかもしれません。

自分が何かをしようとするときに、「相手を嫌な気持ちにさせる行動ではないか」「相手のことを考えていない行動ではないか」と考えるのは、だれにでもできることだと思います。一人一人が、すべて自分の気持ちを優先するのではなく、少しでも相手の気持ちを考えて行動するようになれば、私の祖母のように傷つく人も少なくなると思います。このことから私は「考える」ことがとても大切だということ強く感じました。少し落ち着いて考え、行動することにより、救われる人は増えると思います。これから私は、自分が何か行動をするときには一度「考える」ということをして、少しでも多くの人が気持ちよく過ごせるようにしていきたいです。そして、それを広めて、私だけでなく、多くの人ができるようになったらいいなと思います。そんなお互いがお互いを思い合える日が来るように、私は自分にできることを精一杯やっていきたいです。

本当の「人権」

塩津中学校 3年 鳥居希実

希実さんは、負けず嫌いのしっかり者で、一部の仲間から師匠と呼ばれています。毎年行われる合唱コンクールでは伴奏者として活躍し、昨年度は伴奏者賞を受賞しました。後期生徒会副会長となり、一人一人が自信をもって生活でき、充実感を味わえる学校を目指して日々頑張っています。

「うそ！最悪じゃん…。」

今日の体育は、私の大の苦手、バレーボール。しかも、4対4の試合形式だ。いやだなあ…と心の中でつぶやいていると、授業が始まってしまった。すごく嫌だけど、唯一の望みはチーム分けだ。それさえ良ければ、何とか…。

「チーム発表するぞー。」

(ガーン…。)

私のチームは、クラスでも一番運動神経の良いA君とB君、そしてあまり上手ではないけれど私よりは少し上手なC君だった。普通だったら4人中2人は女子だが、欠席者の関係で女子は私だけ。しかもあまり話すことがな

いメンバーだ。

(最悪だ…。1時間我慢だな。)

「ピーッ!!」

試合がスタート。

(うまい2人にまかせて、私はうしろの方で見ようかな。)

私がやるよりも、2人だけでやったほうが確実にうまくいく。

「希実、いくよー。」

A君が私にパスをしてきた。

「えっ…。」

(何で私一!?無理だよー!!)

とんで来たボールを何とか返すと、B君がうまく拾って相手に返し、こちらの点が入った。実は、体育の特別ルールで、3人がボールに触れてから相手に返して点を入れると、一気に3点入る。でも、私を入れて3点を狙うよりも、ほかの3人でやった方がうまくいくことに違いない。

(あー、今度はボールが来ませんように…。)足を引っ張りたくない一心で、端の方へ移動する。しかし、そんな不安は少しずつ消えていった。あれだけ下手な私でも、なぜかボールがとれるのだ。もちろん失敗もするけど、前よりも全然できるしとても楽しい。

「希実、いくよー!」

「うん、わかった。」

「おー、やったー!3点入れれたじゃん。」

「ドンマイ、ドンマイ。」

プレーの間もプレー中も、声を出して励ましてくれる。ミスを責めるなんてことは全くなく、とてもやりやすかった。試合にも勝つことができ、安心してると、

(なんで今日はこんなに楽しかったんだろう?)

という疑問が生まれた。最初はすごく嫌だったのに、プレーをするにつれてだんだん楽しくなっていったのだ。理由として、ふと思いついたのは、2人の思いやりだ。背が低く、バレーの苦手な私のことを考えて、声をかけてくれたり、ワンテンポおいてとりやすい位置にパスしてくれたりしていた。もしもそれがなければ、嫌な気分で一時間過ごしていただろう。そういう配慮で、みんなが楽しく過ごせることに気づいた1時間だった。

「人権」と聞くと、「生きていくうえで生まれながらに持っている権利」などと、難しい印象を受けてしま

う。しかし、全員の人権を保障することは本当にシンプルな方法で叶えられるのではないかと今回の経験を通じて強く感じた。

相手の気持ちやおかれた状況を想像して、自分だったらどうされたら嬉しいか、どう接してほしいかを考えること、つまり小さな思いやりによって笑顔がうまれ、連鎖となって幸せが広がっていくと思う。地球上の人々全員が幸せと感じながら生活できる世の中こそ、本当の「人権」が保障されていると言えるのではないだろうか。

同じチームのみんなが思いやりをもって接してくれたから、私は笑顔で楽しく過ごせた。そういう小さなアクションでも人は幸せになれると思う。しかし、実際、思いやりとは簡単にして難しいものだ。もしもこんなことをして〇〇って思われたらどうしよう、別に自分には関係ないし、そんな思いでアクションを起こせない人は多いだろう。私もそうだ。でも、自分から動かなければ何も変える



ことはできない。相手への想像力を働かせて、勇気を持ってアクションを起こせば、相手は笑顔になるだろう。私のように、その相手も考えが変わってアクションを起こすことができれば、それが連鎖となって世界中に広がっていくかもしれない。一人一人のたった一つの行動で、大きなものをかえる可能性を秘

めているのだ。私には、あまり大きなことはできない。でも、困っている人に声を掛けたり、問題の解き方を教えてあげたりするぐらいなら私にもできると思う。私も、勇気を出して思いやりのある行動を試してみたい。私を助けてくれたチームの仲間のように。

その一言で

中部中学校 3年 多賀そら

そらさんは仲間を気遣う優しさを持ち、周囲の人を明るく、温かい雰囲気の中で包んでくれます。誰に対しても分け隔てなく接し、みんなから愛される存在です。前期は生徒会副会長となり、常に学校のために思いながら生徒会活動に取り組みました。

「今日、友達とけんかしちゃってどうやって明日話しかけよう。」

よくある、学校で友達とのけんか。不安な私の顔を見て、

「そら、どうしたの。元気ないじゃん。相談でも乗ろうか。」

と、心を救ってくれる家族や友達の言葉。でも、このとき、そんな「言葉」が時として恐ろしい凶器になってしまうことに、私は気づきませんでした。

朝のニュースを見ていると、心を痛めつけるようなニュースが目に入ってきました。

「中学3年生の女子生徒が自殺した件で、中学校で何か問題がなかったかを調査しています。」

自分と同じくらいの歳の子が、自ら命を絶った行動に、「かわいそう」「どうして助けることができなかったの」と思いはしたものの、客観的に見て、流してしまいました。

自殺の原因は色々ありますが、ニュースでよく耳にするのは「いじめ」です。このいじ

めの中にはどんなことが含まれるのでしょうか。体を傷つける暴力。または、物を隠す、悪口を言うといったものでしょうか。私が身近で一番、いじめの原因だと思うものは、「言葉の暴力」です。私たちの身の回りには、数えきれないほどの「言葉」があります。そして、相手を傷つける言葉が日常の中にあふれ返っていると思うのは私だけでしょうか。「ばか」「しね」「うざい」「きえろ」たった一言。たった二文字。ついいら立ってしまうときに出る言葉。もしくは意図的に出した言葉。その言葉を言

われても、最初は何も感じずに消えてなくなるかもしれません。でも、それが、一つ二つと心に積み重なる

ことによって、人の心はむしばまれていきます。そうならないためにも、私たちは、自分のしている行動を見直し、自分の発する言葉



に責任をもつべきです。

いじめの中にある「言葉の暴力」。言葉一つ一つにはとても大切な意味が込められています。世の中の言葉には私たちが後押ししてくれる、救いになる、すてきなものがたくさんあります。でも、その一方で言葉は恐ろしい凶器にもなります。簡単に人の命を奪う原因にもなります。生きている以上、言葉と向き合っていかなければなりません。この日本が、世界中が温かい言葉にあふれることを願います。

私は、これからも、大人になっても、おばあちゃんになっても、関わる人たちに温かい言葉をかけたい。そして、自分が言った言葉で、少しでも悩んでいる人たち、苦しんでいる人々を救いたい。そう思います。

「大丈夫？相談に乗るよ。」

「本当にありがとう。」

たくさんの人からももらった温かさを私も言葉にして、だれかを救える存在になりたいです。

高齢化社会について僕たちが考えること

蒲郡東高等学校 2年 平野 純基

平野君は何事にも真面目に取り組み、努力を惜しみません。現在は情報に興味があり、将来は情報系の大学に進めるように毎日の勉強を必死に取り組んでいます。

高齢化社会と聞いてみなさんはどう思いますか。多くの方がマイナスなイメージを持っていると思います。しかし本当にそうでしょうか。僕はむしろ高齢者が社会を明るくする存在であると思っています。

先日、インターンシップに参加しました。僕は、認知症の高齢者の方が従業員として働いている飲食店に行きました。人前に立つことが苦手な僕にとって接客は、とても難しく緊張が収まりませんでした。しかしそんなときに目に飛び込んできたのが従業員の方の笑顔でした。その笑顔は僕の背中を押しているようでした。社会では、若い力が必要であると言われていますが僕がインターンシップで感じたことは、高齢者の方の長い人生で得た経験値こそが社会にとって必要であると思いました。そして、それは若い人に継承すべきことであるとも思いました。

僕の身近でも学ぶべき人が存在します。そ

れは祖母です。祖母は78歳になる今も仕事を続けていて、一人で家事もこなします。本当は疲れているはずなのに、僕には一切疲れた表情を見せません。常に笑顔で過ごしています。笑顔でい続けることがどれだけ難しいかをインターンシップで学んだため、改めて祖母のすごさに気づかされました。

僕は、従業員の方と祖母の姿から共通点を見つけました。それは、元気であることです。60歳になると定年退職する方がほとんどですが、これだけ元気な姿を見ると、定年退職という制度は必要ないのではと誤ってしまいます。人生100

年時代と言われる現代の社会では、高齢者の方がどのようにして生きていくか



を考える必要があると思います。だからこそ、元気であるうちは若い人とたくさん交流をして社会の中で道標的な存在として活躍してほしいと思っています。

残念ながら、高齢者の方の事件や事故のニュースを見る機会も増えてきました。いくら元気であっても若い人たちとの共存を第一に考えていなければ社会として成立しないと思います。若い人たちは高齢者の方に対して何ができるのか、高齢者の方は若い人たちに何を教えられるのか、この二つの関係性が

確立してこそ社会は流れていくと思います。そのために、お互いを尊重し合うことが関係性を確立するうえでは重要なピースであり、それこそが共存のテーマであると思います。

僕はこの発表を通して、今まで以上に高齢者の方を大事にしていこうと思いました。そしてそのために、高齢者の方々が安心して暮らせる社会を若い世代から築き上げることができるように積極的に行動したいと考えています。

他人を受け入れる強さ

三谷水産高等学校 2年 竹内友美

情報通信科に所属する友美さんは、常にクラスでトップの成績を残しています。高校入学時から進路に対する意識が高く、周りからの信頼も厚いです。部活動は情報技術部に所属し、日々ドローンを活用した研究に励んでいます。

価値観や意見の相違によって生まれる事件やいじめ。私たち学生はそういった経験をした人が多くないため、なぜ起こってしまうのかどうしたらなくなるのか、あまり深く考えることはないでしょう。

他人との相違で傷ついている人命をも失ってしまった人は確かにいます。そこで私は、なぜ起こってしまうのか、どうしたら諍いをなくすことができるのかを考えたいと思います。まず、なぜ事件やいじめにまで発展してしまうのか。それには内的要因と外的要因の相互関係があると考えました。

内的要因としては、凝り固まった思考と偏見によるものが挙げられます。意見交換などの経験が少ない人、漫画や小説などの創作物に触れることが少ない人は特に、そういった傾向があるのではないのでしょうか。他にも思春期、成長期の最盛期である学生は、心が未

発達であるため、意識的に抑制することができず、いじめなどに繋がると考えました。そして今挙げた内的要因は、一人で形成されるものではありません。外的要因と強く影響しあっています。

外的要因としては、生まれ育ってきた環境や周りの人々、学校など社会的な場所での立場などが挙げられます。

先も述べたとおり、内的要因と外的要因は影響しあっている、相互関係にあると考えています。ですので、一部の人や物事としか関わらないと新しい考えや刺激は手に入らず、見聞した内容により変化が生まれるのです。

もちろん、今まで挙げた例に当てはまっても、事件やいじめに無縁な人の方が大多数でしょう。それは、自分の中での他人を受け入れられる容量の大きさの違いだと考えました。

では、どうしたらその容量を大きくすることができるのでしょうか。これは私自身の課題でもあります。書物や今までの経験などから、私が気を付けていることがあります。一つ目は、自分の意見だけを押しつけすぎないこと。二つ目は、他人の意見を否定から入らないようにすることです。

私の知人には、尊敬できる人がいます。その人は、私と違う考えでぶつかったときに、なぜそう考えたのかを聞き、「それなら、こうしてみたら良くなるかも」とまず受け入れてくれ、さらに自分の意見も取り入れた改善点を挙げてくれます。私は全く不快にならず、何度も助けられています。

他人を受け入れるということは、未知のものに触れるということで、簡単にできることではありません。他人の意見に流されるのではなく、受け入れることができ、自分の成長へと繋げられる人を、心が強い人であると感

じます。どうしたら受け入れる容量が大きくなるか、明確な答えはありません。しかし、それを模索し考えながら他人と接することで今までと違ったコミュニケーションが味わえるのではないかと考えました。

他人との意見や価値観の相違を、新鮮で楽しいものだと捉えると、事件やいじめにまで発展せず、自分の成長にもなり、結果的に社会の安心にも繋がって行くのではないかと考えています。

私自身も、「他人を受け入れる強さ」を高めていくことで、より良い社会づくりに貢献したいと考えています。



オリジナルに生きる

蒲郡高等学校 2年 板井大和

板井くんはバレーボール部に所属しており、毎日熱心に部活動に取り組んでいます。その一方で生徒会執行部としても意欲的に活動し、生徒会副会長としてよりよい学校にするべく尽力しています。

残念な話ですが、夏休み明けの9月、全国の児童・生徒の自殺が1年を通して最も多くなることは皆さんもよく聞く話ではないでしょうか。日本の若い世代の自殺は深刻な状況にあると厚生労働省が発表しています。夏休み明けに、何が彼らを追い詰めてしまうのでしょうか。「学校が始まる」ことが彼らにどんな負担を与えてしまうのでしょうか。

夏休みが終わり、新学期がスタートすると

生活環境が大きく変わり、プレッシャーや精神的な動揺が生じやすいことが一因として挙げられると思います。ある新聞記事では学校の辛さとして、クラスカースト（教室内の身分格差）によるいじめを受け、「死ぬほどつらい学校に戻らなければならないことが苦しめる」と分析していました。

いじめの被害で多いのがスマートフォンによるSNS上での誹謗中傷です。相手に面

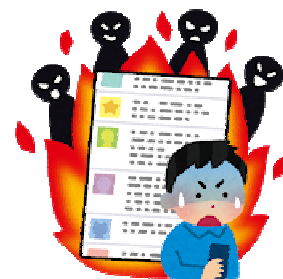
と向かって言えないことをインターネット上に投稿することが残念ながら常態化しています。

最近よく「炎上」という言葉を耳にする人が多いと思いますが、皆さんはこの言葉の意味を知っていますか。「炎上」とは、インターネット上において不祥事の発覚や失言などと判断されたことをきっかけに、非難や批判が殺到し收拾がつかなくなっている事態や状況を指します。インターネット上で攻撃する相手とは全く面識がないことが多いのに、話題に便乗し罵詈雑言の限りを尽くすのは無責任な行為であり、恥ずべき行為であると感じます。なぜなら投稿した本人は心のもやが晴れたようにスッキリしてそれっきり忘れてしまうとしても、言われた人の心には深い傷が残ってしまうからです。誹謗中傷している人物は、それが悪いことだとわかっているながらスマートフォン一つで簡単に投稿でき、顔を知られていないという安心感から、罪悪感がなくなっているように感じます。この罪悪感の喪失は、大勢で特定の相手をいじめるときの心理に似ていると思います。

現在では、こうしたいじめや誹謗中傷を未然に防ぐための様々な対策が取られていま

す。しかし今日の日本の状況は、いじめも誹謗中傷も減少するどころか、逆に増加していると言われています。

そのような世界で私たちはどうあるべきなのでしょう。SNS上での言葉。「それが絶対」なんて誰が決めたのでしょうか。身勝手な他人の誹謗中傷という雑音に押しつぶされてはいけません。



過去に縛られず、未来に目を向けながら今を生きていく。むしろ、過去を上手に活用し、未来をイメージしながら最大限の力で生きていく。周囲の雑音に惑わされないことが大切であり、自身の心の中にある真理と良心に従って、オリジナルに生きていくことがこの世界を強く生き抜くために必要だと感じます。

私はこれから胸を張って堂々と生きていけるように、高校生活で多くのことを学び、様々な経験をしながら成長していきたいです。



V 蒲郡市子ども・若者支援ネットワーク協議会の活動報告

1 本年度のネットワーク協議会の活動

(1) 代表者会議の開催(6/17)

- ・30年度活動報告、令和元年度活動方針・計画等の提案